

ドイツに学ぶ歴史教育

菅原 彩

「はじめに」

今回のアウクスブルク滞在で、私が最も学びたかったのが、「ユダヤ人迫害という人権侵害を行った過去の行為について、子供たちにどのように伝えているのか」でした。

近年日本が行う歴史教育について諸外国から不満の声が上がっているものの、従軍慰安婦問題など、日本が世界大戦期に多くの人の人権を踏みにじってきた過去について学校の授業で学ぶ機会はほとんどありません。高校で学ぶ日本史の教科書を見ても、世界大戦については戦争の経過に関する記述が中心で、日本人による人権侵害については言及されないこともあります。

日本と同じように、人権侵害を行った過去を持つドイツではどのような人権教育が行われているのか調査し、今後の日本の教育の参考にしたいと思い、このテーマを選びました。当初予定していた人権教育の授業見学や指導者からの聞き取り調査などは行うことができなかったため、自分で調べられた範囲について述べていきます。

「過去の克服」

ドイツでは過去と向き合い、負の過去から学ぶための取り組みが行われています。「過去の克服」と呼ばれる一連の試みは、ナチの過去と正面から向き合おうとするドイツの姿勢を象徴する言葉として有名になりました。この姿勢は現在のドイツの歴史教育にも生きており、ナチの過去を次世

代に伝えることが最重要課題に据えられています。そのため、ドイツの歴史教育では現代史が重視され、ユダヤ人に関するテーマは歴史の授業はもちろん、政治・国語・宗教学などの時間に扱われることもあるそうです。また、強制収容所跡をはじめとするさまざまな記念館、歴史博物館、展示会の見学が校外学習プログラムとして授業に組み入れられています。私が今回訪問したギムナジウムでは、毎年ある一定の年齢に達した生徒は必ずダッハウ強制収容所で施設見学を行うそうです。

ダッハウ強制収容所入口



このダッハウ強制収容所では、施設が開かれた当初はユダヤ人に限らず政治犯や難民、ホモ・セクシュアルといった人々をマイノリティとして差別し、収容していました。収容者の識別表を見ると、収容された人達は収容理由ごとにカラーや形の異なるマークを与えられ分類、管理されていたことが分かります。それが世界大戦期に入ると、ユダヤ人迫害に伴い収容者に占めるユダヤ人の

割合が増えていったそうです。

当時使用されていた収容者の識別表



この強制収容所では、当時の生活の遺物が多数展示されており、間近で見ることが出来ました。実際に使われていた食器や、収容者が着せられていた洋服、所狭しと並べられたベッドやトイレ、拷問のために使用されていたむち打ち台など。収容者達の悲惨な生活を現在に伝えていました。



トイレとベッド

何よりも私に衝撃を与えたのは、遺体を焼くための焼却炉でした。新たに新設されたものもあわ



焼却炉

せると、約7~8台の焼却炉が並んでおり、一見パン焼き釜と変わらないように見え

ました。ここで

何万人もの遺体が処理されたと聞き、非人道的なことがまかり通る風潮を作り出してしまふ戦争の恐ろしさを改めて思い知りました。強制収容所の見学は、想像していた以上に私たち団員にショックを与え戦争というものに向き合うきっかけになりました。

近年、日本では遠足や修学旅行の行き先として広島や沖縄などの戦争にまつわる場所をあえて選ぶ学校は以前に比べ減っています。戦争時代を知らない私たちは、本や映像、実際に体験した人々から話を伺うといった方法で当時の恐ろしさを想像することしかできません。そんな私たちでも、このような施設を訪れることで肌で感じる、学ぶことは沢山あります。今回の訪問を通して、改めて戦争にまつわる施設を保存することの大切さ、後世に伝えていくことの意義を再認識しました。

「歴史教育の変遷」

私が今回の研究調査で最も驚いたことが、ドイツの教育現場では先人の行ってきた行為を他人事ではなく、自分たちの歴史の一部であると徹底的に教えていることでした。ドイツで実際に使われているある教科書では、ナチのユダヤ人迫害に

ついて次のように述べています。「ナチ独裁は過去のものであるが、我々の歴史の一部であることに変わりはない。歴史を作った人々、歴史に苦しんだ人々がいなくなっても、歴史はそれとともに過ぎ去りはしない。…人間の尊厳がいかにかげいのないものか、諸国民の相互理解と平和がいかに大切かを学びつつ、現在ひいては未来の政治生活を作り上げてゆくことを歴史は我々に変わらず求め続けている。」この一説からも、過去の出来事を単に過ぎ去った歴史的事実として学ぶだけでなく、今後の自分たちのあり方を積極的に考える力の育成につなげようとしていることが分かります。

今でこそ「ナチの過去はドイツの抱える負の遺産である」という認識がドイツ人に広がっていますが、この意識の共有までには長年にわたる教育界の努力の過程があったそうです。戦後の占領下のドイツでは、学校で歴史の授業を行うことが禁止された時期がありました。その後、徐々に歴史の授業が行われるようになったものの、ナチの過去は歴史の授業で扱うにはあまりに近すぎたこともあり、ナチズムに関わるテーマをそのまま取り上げることはあまりありませんでした。その結果、右翼の若者によるユダヤ人墓地の破壊など、若年層の歴史的知識の不足が問題視され、学校内外の教育内容の見直しが叫ばれるようになりました。

現在日本では、中学と高校でそれぞれ一回ずつ約4年間をかけて通史を学びますが、ドイツでは

12歳から15歳までの3年間をかけて古代から現代までの通史を学び、16歳以降の歴史の授業では細分化されたテーマごとに深く学ぶことに重点が置かれています。教科書も個々の項目の説明、写真、史料、生徒への問いかけなどから構成されているものなどを使用し、過去の歴史的事実について実感持って認識できるように、事実を前に考える力を養うことを目的として授業編成がされています。

7年生(12歳)の授業風景



「ドイツの教科書」

歴史に限らず、ドイツでは教科書の種類が豊富です。これは、「ドイツが日本と異なる学校制度を取っているから」という理由以外に、「使われる教科書が州ごとに違うから」という理由が挙げられます。ドイツは16州からなる連邦制をとっており、各州が独立性を持っています。教育も例外ではなく、指導要領も州ごとに独自に定められているそうです。当然のことながら、教科書を審査し、認可するのも各州に委ねられています。学校は州が認可した教科書の中から実際に使用する教科書を選びます。見学したギムナジウムでは、

子供の教育に関心の高い保護者も多いため、教師の意見はもちろん、保護者の意見を反映した教材選びが行われていました。

数年前、日本では沖縄県竹富町で中学生の使用する公民の教科書をめぐり、文部科学省が町に対して是正要求を突きつけるという事態が起きました。これは、竹富町が沖縄の基地問題についてより詳しく取り扱っている教科書を選んだところ、同地区内の他町との意向と異なり町ごとで使用する教科書が異なる状態になったからでした。文部科学省は一つの地区内で異なる教科書を使用することは違法にあたるとし、教科用図書の中でも教科書採択委員会の推薦した教科書を選ばなかった竹富町に対し、国費ではなく町の財源でまかなうよう指示しました。この出来事は、現場で実際に指導する教員や地域住民の意見が国の意向に添わない場合には不利な扱いを受ける可能性があることを示す結果となりました。

学校で使用する教科書は子供の教育に大きな



	文部科学省	竹富町教委	沖縄県教委
要求について	竹富町が八重山採択地区協議会の選定とは異なる教科書を使用しているのは違法であり、早急に是正要求に従うべきだ	民主党政権時代は、町が独自に教科書を購入して無償配布することは認められており、是正要求には従わないが、不服の審査申し立てもしない(事実上の無視)	是正要求が妥当かどうか、時間をかけて議論すべきだ(昨年10月から今年2月にかけて、5回にわたり判断を先送り)
採択地区からの離脱について	教科書無償措置法の改正の趣旨に反しており、現在の枠組みを変更すべきではない	法改正により採択地区の範囲が「市郡」単位から「市町村」単位になったので、離脱は可能	八重山地区一体で採択するのが望ましいが、竹富町の判断は尊重する
今後の対応など	竹富町が是正要求に従わないなら、違法確認の訴訟も視野に検討	八重山採択地区から離脱し、教科書の単独採択を目指す	5月下旬の定例会で沖縄県内の採択地区を決定

影響を与えます。誰が推薦したからではなく、「自分たちがどのような子供を育てたいのか、そのために必要な教育は何か」を規準に必要な教育や教科書選びを行っているドイツを見習うことも大切なのではないかと思います。

「歴史教育の課題」

現在のドイツでは、歴史教育の対象者がナチの暴力支配を経験した世代から直接には経験していない第二世代、さらに第三世代、代四世代へと移っています。今日、ナチの過去に関する教育では「歴史的事実の理解」及び、「ナチの過去を持つ国に生まれたものとしての責任を自覚させる」ことが重視されています。これは、ナチの過去について学ぶことで、青少年に見られる排外主義や極右思想への傾倒を未然に防ぎ、人権侵害という悲劇を繰り返さないことを目的としているからだそうです。ナチの過去が国民の大半にとって経験された過去から経験していない過去になるに従って、それを身近なもとしてとらえ、実感を伴って学ぶことは急速に困難になってきています。現在のドイツでは、このような事態に対し、どのように対処していくのが歴史教育の重要な課題となっています。

このような「記憶の風化」は、ドイツだけの課題ではありません。世界大戦終結から70年がたち、戦争の記憶を持つ人々が減ってきていることは日本でも同じです。今年の夏、沖縄を訪れた学生が戦争体験者の方に対して暴言を吐いたこと

が問題になりました。無知ゆえの発言だったとしても許されるものではなく、戦争についての教育のゆらぎを感じました。時の経過とともに薄れていく戦争への反省をどのように後世に伝えていくべきか、常に考え続ける必要があると思います。

「加害者としての意識」

ドイツの戦争にまつわる歴史教育について述べてきましたが、今回の調査を通して日本とドイツの大きな違いは「加害者であるという意識」の有無だと思いました。ドイツが「ナチの過去はドイツの抱える負の遺産である」事実を受け入れ、教育しているのに対し、広島、沖縄の歴史博物館、展示会などを訪れたりすると、原子爆弾の恐ろしさやひめゆり学徒隊の悲惨な最期など、特に「戦争の被害者」としての日本人という面が強調されているような印象を受けます。また、前述したように、学校で学ぶ歴史も戦争の経過に関する記述が中心で、日本人による人権侵害については言及されないことが多いです。

戦争の当事者であった日本は敗戦した結果、一時GHQに支配されましたが、他方で、確かに「加害者」として他国を侵略して人権侵害を行った過去もあります。歴史は語る視点によって「正義」のありかが変わります。私たち日本人が、自分たちの学んできた歴史があくまで日本視点から語られたもので、限られた情報・知識であることを意識しない限り、近隣諸外国との歴史認識問題の解決は今後も難しいと思います。

「おわりに」

「ユダヤ人迫害という人権侵害を行った過去の行為について、子供たちにどのように伝えているのか」をテーマとした今回の調査では、ドイツ国民が過去の出来事を自分たちの歴史の一部として受け入れ、それを後世に伝えていることが印象的でした。また、討論や議論などを通して自分の意見や考えを確立し、自分で考える力を育成していく姿勢は、日本にはやや欠けている印象を受けました。歴史を過去の出来事ではなく、自分たちが国際社会の一員として生きていくためのお手本として捕らえる意識作りが今後の日本では必要だと思いました。